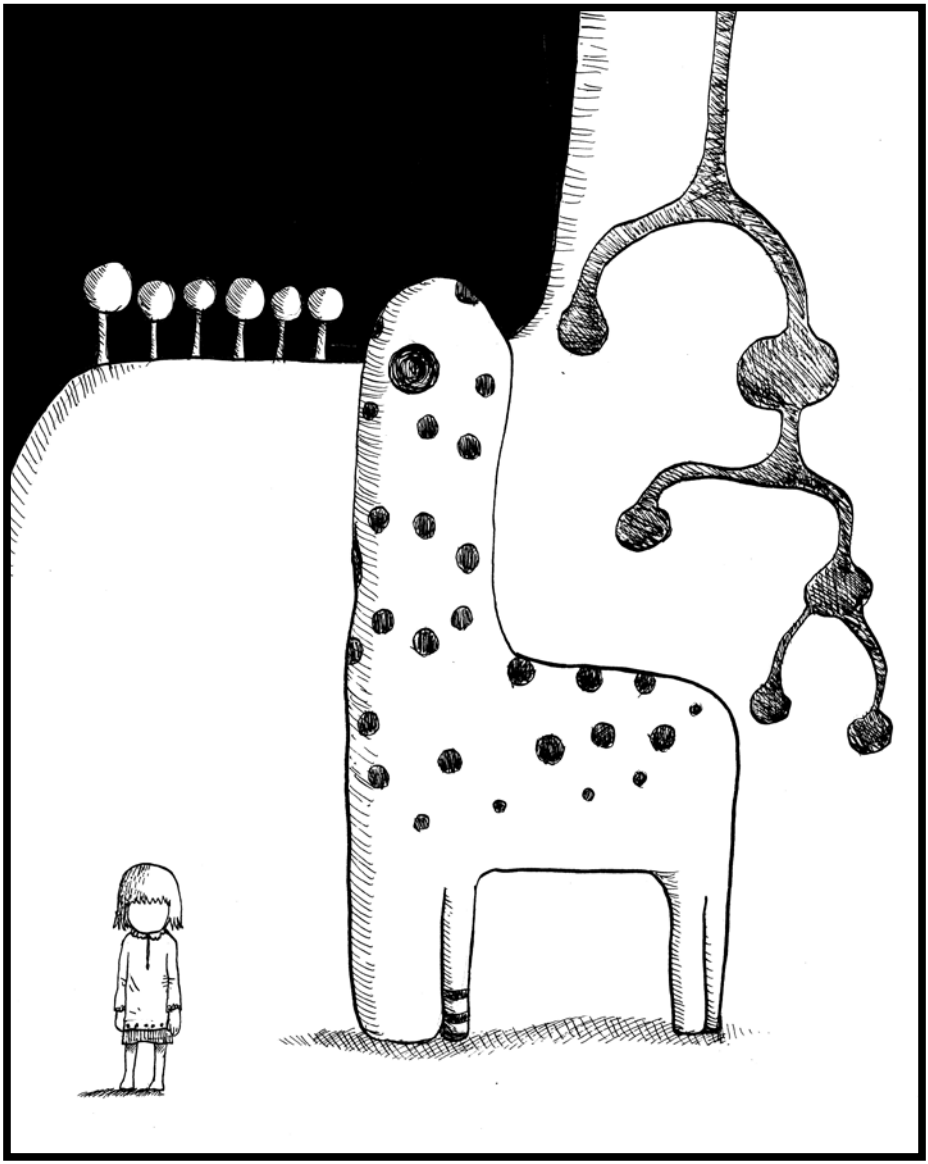
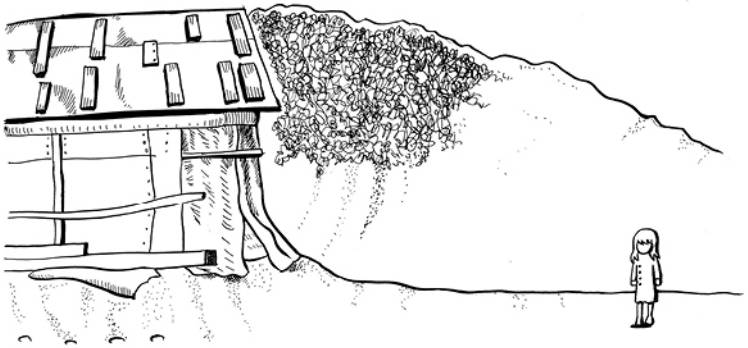


クロ新聞

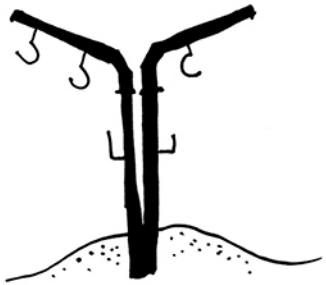


クロ埼は木場から黒鳥を抜け、開発著しい亀貝Ｉ・Ｃをくぐりまっすぐ。自転車で三〇分ほどで海に着く。四〇二号線の手前、松林に囲まれた遊歩道「入日の森」で一時期ジョギングをしていた。単調な風景の中にも野鳥のさえずり、野良猫出没、犬の散歩などあり。ハイテクノロジー機器を駆使して一ｋｍあたり何分のペースで走ったと発表している人にあこがれて、片道約一二八〇ｍを時計で時間を計りながら走りペースを計算したのだった。だいたい一ｋｍを六〜六・五分くらい。徐々に距離を延ばしたところ、便意・空腹・疲労・関節の違和感に耐えられなくなりすぐにやめてしまった。世界で一番使われているらしいＧＴ２０００という靴を七七〇〇円も出して買ったのに全く無駄になってしまった。最近、松くい虫防除のため薬を撒いたらしく、木に触れたら手を洗うようにと注意書きが。ますます積極的に走ろうと思わなくなった。代わりと言ってはなんだが海辺を散歩するようになった。

砂浜はきらきらと光る、波打ち際から上空へ羽ばたき潮風に流されていく小鳥、地を埋めつくす小さな葉を踏みつけながら歩く。砂の上なので膝や関節への負担は少ないと思う。歩いた距離がわからないので速度は計算できず、もっともスピードを出して走ることはできないけど。風景を眺める楽しみがある。砂丘の地形、草、流木、少しは人間の手も入っているのだろうけど、普段の生活でみている無機質なプレハブのビル、施設、家屋、企業、街中に侵食する車を走らすための道路、標識、金儲けのノウハウに特化したお店と看板…のあふれる風景に比べれば、人間の意図が入ってなくて良い。風と波でできた自然な地形と漂流物。河川敷や公園くらいはもっとほったらかしても良い気がする。

浜辺は人がいないこともあるけど、意外と多様な人たちと会う。釣り人、サーファー、ゴルフの練習をする人（ずっとバンカーショットになるのか、ボールを捜している）、祭りの笛を練習する人、犬の散歩、砂丘のてっぺんでほら貝を吹く人（か細い声をあげてむせている）。

夕日の家こんぺいとう。いずみ福祉園が管理する障害者と一般市民の交流の場。パン屋のイートイン、スーパー併設のフードコートなどでなく、純粋な喫茶店で唯一たまに行くところ。理由は、近くて比較的リーズナブル、商売っけもなく他の客もいない、普通に静かで窓からは海がみえる。席に座った瞬間に《何になさいますか？》と訊かれたり。《コーヒーですか？》と訊かれたけど紅茶を頼んだのに、やはりコーヒーが出てきたこともあったけど。

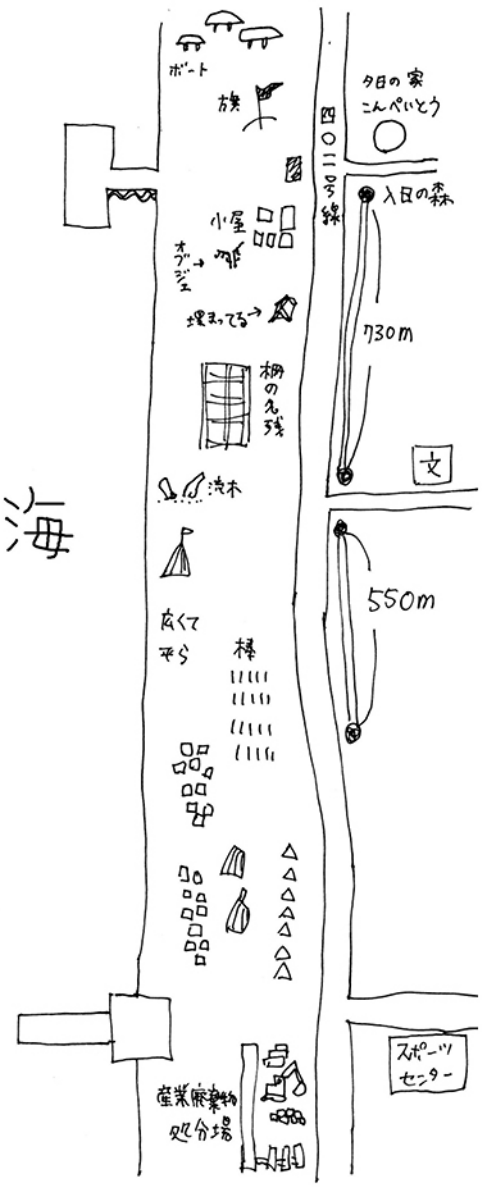


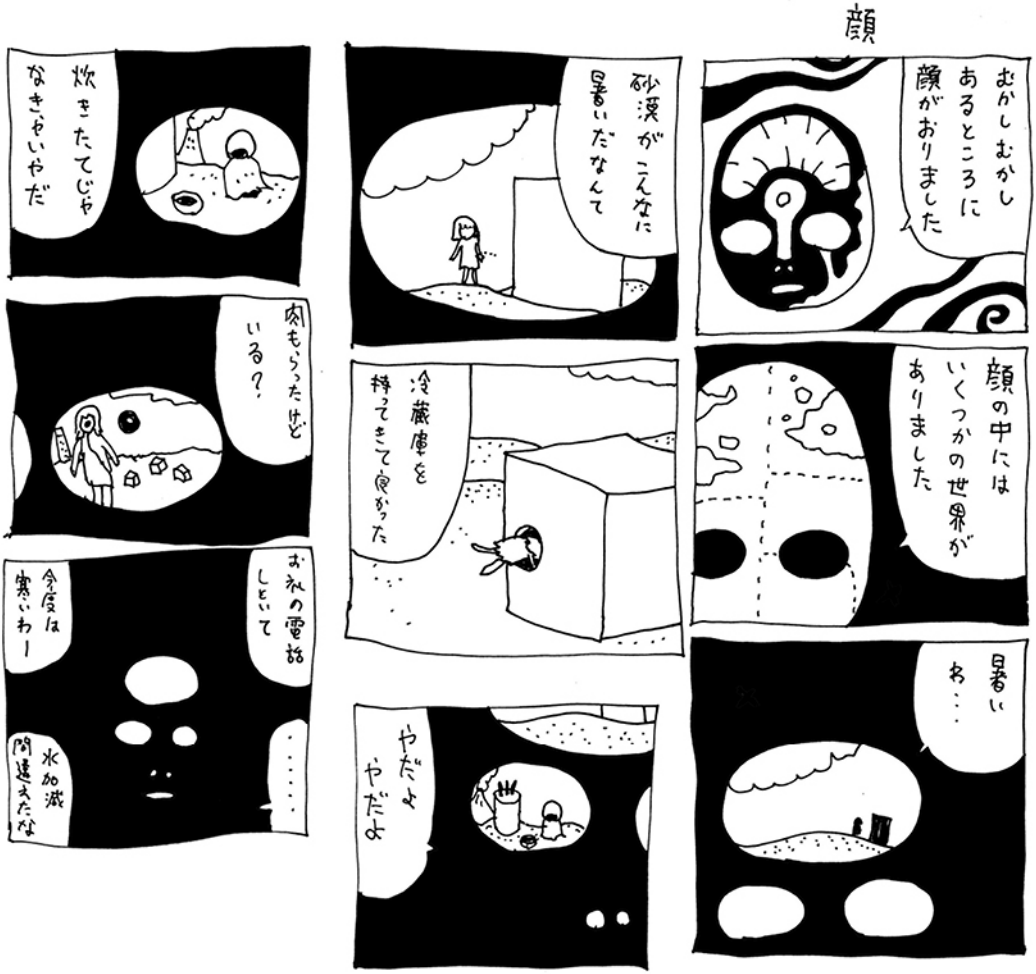
それを差し引いてもたまに行ってゆっくりしてもいいところだと思う。メニューは、コーヒー、紅茶、ココア、グレープフルーツジュース、アップルジュース、オレンジジュース。全て二〇〇円。

遠くの浜辺にいくつかのボート。目の前には、なんてことない黒い旗が小さい割に存在感を出している。網で囲われたポンプらしき設備から地中を赤い管が走り、海に突き出したコンクリートの舞台につづく通路の側面を赤い蛇のようにのびている。小屋が五件ほど密集している地帯はとても好きな場所。ほどよい廃れ具合、外面は木だけでなく布をたらしたような部分もあり、趣深い造形となっている。各小屋の位置関係も良く、一見ちょっとした砂丘

に存在する集落の一部を切り取ったかのように見えなくもない。小屋の近くには金属製のフックがついた何かをかけるものらしいダダっぽいオブジェ。一箇所フックが取れていてアンシンメトリーな造形になっているのが味がある。小屋が埋まって屋根だけが飛び出ている場所。安部公房の砂の女を彷彿させる。映画の砂の女は岸田今日子がエロくて良かった。海岸には結構、緑がある。ところどころにアサガオが咲き、柵が埋まっている地帯には小さな白い花が並んでいる。圧倒されるような美しさではないが、こんなところにも花が咲くのだなと心癒されるのだった。砂の上は歩いても歩いてもなかなか進まない。砂漠を旅する人達というのはどれくらいのスピードで進むのだろうか。もがいているようで運動としてあまり楽しくない部類だ。山登りの方が明らかに負荷が大きいのだけど、砂歩きの方が精神的にぐったりする。砂漠を旅する人達の精神力に感服する。

波うち際に流木がある。遠くからみる方が大きくみえる。Ｖ字型に角のように突き刺さっている。なにもない平らで広い砂面が広がっているところは目の保養になる。街中にはなにもない平らで広い空間というものもなくなってしまった。垂直に短い棒がたくさん並ぶ。柵の名残か、簡素なお墓のようにみえなくもない。浜辺の生物の墓、漂流物の墓。漂流物のほとんどは流木、瓶・ボトルの類、浮き、など。期待したほどのバリエーションはない。テトラポットのような四角いコンクリート、立方体の角部分が砂から頭を出して連なっている。北側の海にはテトラポットがつづいているのに丁度ここからなくなっている。海から陸に舞い戻ったテトラポット達なのかもしれない。流木が束ねられテントの骨組みのよう。小さいのと大きいのがならんでいる。海に突き出たコンクリートは立ち入り禁止なのに柵の中に椅子が置いてある。五十嵐浜まで歩くと産業廃棄物の最終処分場がある。最終ということは前段階があるのだろうか。緑の塀で囲まれているけど、以前より剥き出しになっている感じがする。この辺りは油断していると車が走ってくる。昔はこの辺りの浜が好きだったのだけれど、以前ほど魅力を感じなくなった。廃れすぎて殺伐とした感じになってしまったのかもしれない。海岸は風のある日は寒かった。少しもの悲しい気分になったところで帰路についた。





クロ新聞　二〇一四年　六月号

発行所 クロ新聞工場

〒960-1122
新潟県西蒲原郡黒埼町大字木場
090-6141-8386
karafutoneko@gmail.com

編集後記

●本当にひさしぶりのクロ新聞。しかもクロ埼ではなく、クロ埼から一番近い海という強引な展開。●近所の好きなもの特集をやろうとして地元部落を写真を撮りながら何回か巡ったものの、形にすることができなかった。記事にする対象としてあまりに近すぎたのかもしれない。●数年前まではマッチョになって海水浴に行こうと毎年思っていた。もちろんマッチョになることもなく、髪を濡らしたくないこともあり、全く海水浴なんて行かなかった。●最近は健康のために水泳をやろうと思っているのだけれど、プールはバカにならない値段のため躊躇している。海ならタダ。どうしたものかな。